

ハイデルベルク信仰問答より

問 105 第六戒で、神は何を要求していますか。

答え それは、隣人を自分自身によってであれ、他人を通してであれ、心の思いや言葉、素振り、まして行為によって、侮辱したり、憎んだり、傷つけたり、殺したりしないだけでなく、あらゆる復讐心を捨て去る、ということであります。また、私が自分自身を傷つけたり、故意に自分を危険にさらすことをしないことでもあります。このことが、官憲が殺人を防ぐために、武装されている理由であります。

〔別訳〕

答え わたしが、思いにより、言葉や態度により、ましてや行為によって、わたしの隣人を、自分自らまたは他人を通して、そしたり、憎んだり、侮辱したり、殺してはならないこと。かえってあらゆる復讐心を捨て去ること。さらに、自分自身を傷つけたり、自ら危険を冒すべきではない、ということ。そういうわけで、権威者もまた、殺人を防ぐために剣を帯びているのです。

第六戒 あなたは殺してはいけない。(出 20:13)

聖書における「第六のことば」がシンプルに「殺してはいけない」であるのに対し、本問答書における解説は非常に詳細です。それだけ殺人の適用範囲は広いということが分かります。個人間における憎しみから生じるもの、集団リンチ、大規模なジェノサイド、民族浄化……と、聖書読者は幅広く考えることが求められています。

まず、「どうして殺してはならないのか」ということの本質から捉えていく必要があるでしょう。ほとんどの人は、この教えは基本的に「人間同士」の関係においてのみ適用されると考えてきましたが、聖書を冒頭から読んでいくとき、当初は人が動物を殺すことさえ神の御旨ではなかった可能性があることが窺えます。

神は言われた。「私は全地の面にある、種をつけるあらゆる草と、種をつけて実がなるあらゆる木を、あなたがたに与えた。それはあなたがたの食物となる。また、地のあらゆる獣、空のあらゆる鳥、地を這う命あるあらゆるものに、すべての青草を食物として与えた。」そのようになった。(創世 1:29-30)

ここ(エデンの園)では、人間を含むあらゆる動物が草木に関係するものを食物としているようです。

神である主は、人に命じられた。「園のどの木からでも取って食べなさい。ただ、善悪の知識の木からは、取って食べてはいけない。取って食べると必ず死ぬことになる。」(創世 2:17)

人が罪を犯してから、食文化にも変化が生じ始めます。

神は言われた。「裸であることを誰があなたに告げたのか。取って食べてはいけないと命じておいた木から食べたのか。」(創世 3:11)

何らかの意味で「動物を殺す」という行為がスタートするのは、エデンの園から人間が出てからであることが分かります。神が罪人との関係維持のために動物を殺すことを許容されるようになったということでしょう。

アベルもまた、羊の初子、その中でも肥えた羊を持って来た。(創世 4:4)

ところが、「殺す」という行為は動物に止まらず、人間同士にまで及んでいきます。

カインが弟アベルに声をかけ、二人が野にいたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。(創世 4:8)

カインの末裔は、自分に危害を加える者に対して無限の復讐を誓います。

レメクは妻たちに言った。「アダとツィラよ、私の声を聞きなさい。レメクの妻たちよ、私の言葉に耳を傾けなさい。私は受ける傷のために人を殺し、打ち傷のために若者を殺す。カインのための復讐が七倍なら、レメクのためには七十七倍。」(創世 4:23-24)

その後の人類史はまさに「暴力の歴史」であり、殺人の規模は世界的な広がりを持っていきました。

神が殺人を禁じる理由は、神こそが命の源であり、命を与えるも奪うも、その権限が神にのみ属しているからです。神によって造られた人間には「神のかたち」が具わっており、それはどんなに墮落しても失われることのない尊厳と言えます。人が人を殺めることは越権行為であり、自らを神の位置に置くことにほかなりません。

問 105 の答えにおいて「わたしが、思いにより、言葉や態度により、ましてや行為によって、わたしの隣人を、自分自らまたは他人を通して、そしったり、憎んだり、侮辱したり、殺してはならないこと」と言われているのは、他者を悪く思う心と殺害とが根本においてつながっていることを示しているでしょう。「自分自身を傷つけたり、自ら危険を冒すべきではない」とは、自分の命についてさえ、人はそれを奪う権限を持っていないことを意味します。「権威者もまた、殺人を防ぐために剣を帯びている」とは、罪の世における「抑止」のために「剣」が用意されているということであり、本来そのようなものによって平和が保たれることさえ神の御心ではないが、神はご自分の代理として権威者を立て、人が人を殺すことを止めようとしておられることを表しているでしょう。「エデンの外」では人の罪ゆえにやむを得ぬ均衡が取られているけれど、神の根本的な御心はエデンの状態だということです。